

あ と が き

地理学者は、農耕民的であるよりも、遊牧民的である方が望ましい。とはいえ、研究室まで転々とするのは決して好ましいことではない。私は昭和33年4月に理学部から本学部へ着任いらい、一研3階から二本北棟4階、八本3階、二本南棟2階と3階、そして57年夏には一研2階へと移転を重ねてきた。人文地理学教室は小世帯でありながら、かつては教官と学生が三つの建物に分散していたことさえある。二本南棟でやっと宿願の教室統合が実現したものの、わずか数年にしてやむなく立退くことになった。二本建替のため、この夏24年ぶりで一研へ戻ってきた。私個人にとっては、昭和17年に入寮いらい実に40年ぶりの出戻りである。一研へ移ることが決められた時、苔むした古屋の入口、きのこが生えそうな廊下を思い浮べておどましかったが、幸い事務部のご配慮のおかげで、部屋の壁は塗り替えられ、窓ガラスは木木の緑が室内にあふれるかのように透きとおるなど、どうやら当分腰をすえられそうになった。それに何よりありがたいことは、外が静かなことだ。

一方、教室内は活気に充ちてきた。大学院生諸君、シカゴ大学からの研究生 G. Latz 君、教養学科の学生諸君たちも、研究室の設備をよく活用し、勉強に精を出している。その上、56年から57年にかけては、内外から客員研究者たちが集まり、この小教室もちよとした学界のセンターになった感がある。韓国の慶北大学校からは学振招へい教授の洪淳完先生、カナダのレスブリッジ大学からは田中博先生、国内からは日本大学助手の佐野充氏、三田高校の天井勝海氏、長野県からは伊藤一彦氏が相前後して筈を置き、活況を呈した。人文地理学学科の学生数も、57年秋に進学予定者7名を加えて全部で20名をこす記録を示した。

教官数は助手2名を含めて5名となり、この紀要には5本の論文をのせることができた。長身の柴田助手は、人文地理学と教育学の両教室全体をよく見渡して事務をとりしきり、学生たちの面倒もよい。荒井良雄氏は、57年4月より信州大学経済学部の助教授に昇任、工学士、理学修士、教養学部人文科学科助手の履歴にまた一つの新しい所属名が加わった。まさに学際研究時代にふさわしい新鋭である。いっそうの活躍を期待したい。荒井氏の後任助手には5月半ばより内藤正典氏が就任した。教養学科の科学史・科学哲学学科から理学系地理学修士課程、さらに同博士課程へと進み、シリアのダマスカス大学に留学中のところ助手就任のため一時帰国、8月いらい再び厳しい国際環境下のシリアにあつて地域研究に励んでいる。相原順子さんは、年々増大する教室事務をみごとにこなし、当教室の印象を明るくしている。

今回は紀要原稿を年内に出版社へ渡すことができた。

窓外の鳥影動き、年の暮れ深まる第一研究室にて。

1982年12月

西川 治